広域遺跡群詳細分布調査 4

東牟婁地方

広域遺跡群詳細分布調査概報

平成２年３月31日
和歌山県教育委員会

序

紀州熊野には三社権現と称せられる本宮大社、速玉大社、那智大社が存在し、平安時代後期以降、熊野信仰は一世を風靡するようになり、百度にも及ぶ院、門院の御幸によって、中央の宗教的権威を背景とした準国家的な行事として当時定着しました。その後、あらゆる階層の人々が熊野という聖地を求めて巡礼し、「蟻の熊野詣で」といわれるような隆盛を極めました。

古代のこのような面影が、いまも熊野三山の古道や王子社跡に残されております。

和歌山県教育委員会では、昭和61年度から県内の貴重な埋蔵文化財の保存と活用を図るために広域遺跡群詳細分布調査を実施しており、本年度は東牟婁郡の熊野三山に所在する経塚を対象として調査を行いました。

本書は、その調査成果の概要を示したものでありますが、文化財の保護資料として活用され、当地の歴史を知るうえでの一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたり種々御協力いただいた関係各位並びに地元の皆様に深く感謝の意を表し、併せて厚くお礼申し上げます。

平成２年３月31日

和歌山県教育委員会

教育長　高　垣　修　三

例　言

1．本書は、国庫補助事業平成元年度広域遺跡群詳細分布調査の概報である。

2．事業の一部は、財団法人和歌山県文化財センターに委託し実施した。

3．調査は、調査委員羯磨正信・巽　三郎・都出比呂志・藤澤一夫各氏の指導、助言を得た。
（各氏とも和歌山県文化財保護審議会委員）

4．調査の組織は下記の通りである。

和歌山県教育委員会		財団法人和歌山県文化財センター	
文化財課長	北野全美	事務局長	鍋島伊津夫
文化財課副課長	堀代喜蔵	次　長	菅原正明
文化財課主幹	高橋　彬	埋蔵文化財課長	辻林　浩
文化技術班々長	吉田宣夫	埋蔵文化財課主査	永光　寛
〃　主任	藤井保夫	〃	上田秀夫
		埋蔵文化財課技師	黒石哲夫
		〃	河内一浩
		管理課長	松田正昭

5．調査にあたっては、新宮市教育委員会山本殖生・森奈良好氏、本宮町教育委員会田ノ上一馬・山下義朗各氏をはじめ、以下の諸氏、諸機関から御指導、御協力をいただいた。記して御礼申し上げたい。

那智勝浦町・新宮市・本宮町教育委員会、那智大社、速玉大社、本宮大社、阿須賀神社

6．本概報の実測、トレース、写真撮影、執筆・編集は黒石が担当した。

7．本書で使用した遺物番号は本文、図版においてすべて共通する。

目　次

序
例言
Ⅰ　調査経緯……1
Ⅱ　位置と環境……1
Ⅲ　調　査
　1　発掘調査……4
　2　分布調査……8
　3　遺　物……12
Ⅳ　まとめ……12

図1　熊野古道と経塚遺跡……2
〃2　那智飛瀧神社参道周辺図……4
〃3　那智山調査区位置図……7
〃4　新宮周辺図……8
〃5　速玉大社周辺図……9
〃6　本宮周辺図……10
〃7　本宮大社旧社地と備崎周辺図…11
〃8　遺物実測図……14

表1　和歌山県経塚一覧表 3
写真1　飛瀧神社参道……4
〃2　ごとびき岩……8
〃3　本宮大社……10
図版1～8　遺構写真
図版9～10　遺物写真

Ⅰ　調査経緯

和歌山県教育委員会では、昭和61年度から広範囲に分布する遺跡群あるいは２市町村以上にまたがる遺跡などについて、その実態を明確にするために部分的な発掘調査を取り入れた詳細分布調査を継続して行っている。初年度は岩橋千塚古墳群に関連した和歌山市の井辺前山古墳群、62年度は西牟婁地方で銅精錬所跡と考えられていた松煙窯跡群、63年度は高野山に関連して伊都地方の丹生津比売神社で実施した。本年度は東牟婁地方で熊野三山に所在する経塚の分布、範囲、性格等を明らかにするために、那智勝浦町、新宮市、本宮町で調査を行った。

那智山では飛瀧神社参道入口の南西側斜面の樹木を伐採し、４ケ所にトレンチ、１ケ所にグリッドを設け発掘した。次に、参道入口から約 100ｍ南西に位置する平坦地にもトレンチを２ケ所設定し発掘した。また併行して、通称涸れ池と呼ばれている参道入口付近を1/100の縮尺で平板測量した。分布調査は新宮市と本宮町で踏査を行った。新宮市では権現山を中心として、明神山、蓬莱山等を踏査し、また従来から知られている如法堂経塚群、庵主池経塚群、神倉山中ノ地蔵経塚群等の位置を地図上に記録した。本宮町では山在峠から吹越峠、七越山を経て本宮大社旧社地対岸の備崎に至る尾根筋と、備崎周辺、大日山の熊野古道周辺を中心に踏査を行った。

調査は平成元年12月初旬から平成２年２月下旬までの期間実施した。

Ⅱ　位置と環境

熊野三社権現の鎮座する和歌山県東牟婁郡は紀伊半島の最南端を占め、前面には黒潮洗う太平洋が広がり、背後は深山幽谷が延々と続く急峻な山岳地帯である。気候は温暖で、降水量も比較的多い。

熊野地方では新宮市の速玉大社境内で縄文時代前期末から後期にかけての縄文土器が出土しており、北山村下尾井でも後期の縄文土器を主体として前期末から中期末の縄文土器や石器類が出土している。弥生時代から古墳時代の顕著な遺跡としては新宮市の阿須賀神社遺跡があり、弥生時代の円形と隅丸方形の竪穴住居２棟と古墳時代の方形で竈をもつ竪穴住居１棟が重複して検出され、弥生土器、土師器、須恵器、土錘などが出土している。神倉山のごとびき岩々陰からは突線鈕式の銅鐸の破片が出土しており、経塚造営の際に銅鐸埋納遺構が破壊されたと推察されている。那智勝浦町の下里古墳は紀南で唯一の前方後円墳で、全長約60ｍを測り後円部に竪穴式石室がある。出土遺物には碧玉製の玉杖と管玉、ガラス製玉、鉄剣片などがある。

古代以来、熊野の熊は「隈」すなわち、こもるという意味をもち、牟婁も室を表し、神霊のこもる場所であると人々に認識されていた。当地にその後、熊野三山と総称される本宮大社、速玉大社、那智大社が成立し、それぞれ家津御子神、速玉明神、牟須美（結）神を主神とするように

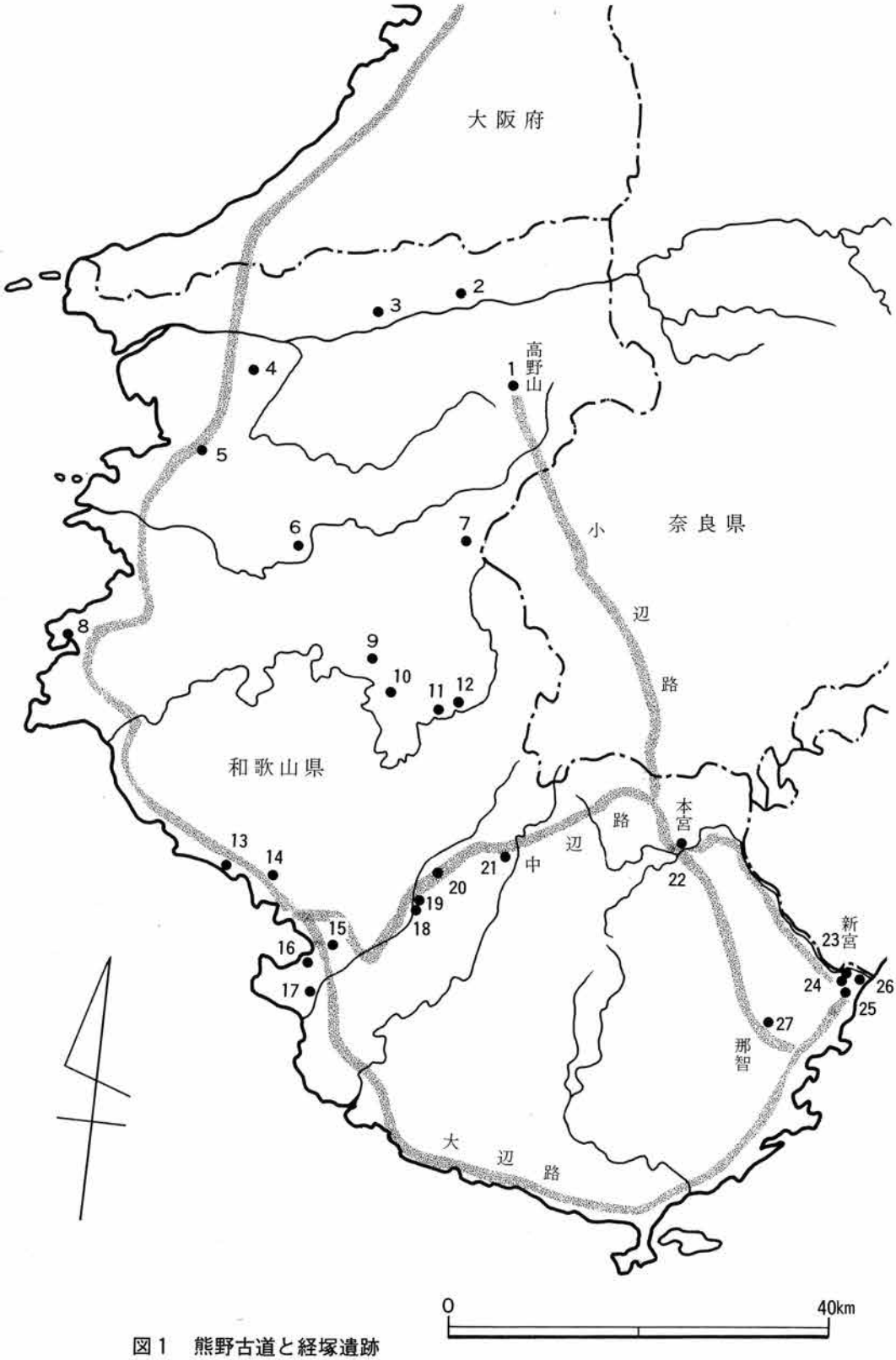


図1　熊野古道と経塚遺跡

表1　和歌山県経塚一覧表　（平安 ～ 鎌倉時代）

No.	名　　称	所　在　地	内部構造		経典	経筒	容器	備　　考
			有槨	無槨				
1	高野山法薬尼経塚	伊都郡高野町高野山奥之院		○	○	○	○	奥之院御廟、永久二年(1114)
2	大　薮　経　塚	〃　かつらぎ町大薮		○		●	○	寺院関係
3	粉河産土神社経塚1号	那賀郡粉河町矢倉		○	○	○	○	粉河寺、産土神社、天治二年(1125)
	〃　2号	〃	○			●	○	
	〃　3号	〃	○				●	
4	明　王　寺　経　塚	和歌山市東山東・矢田	○			●	○	熊野街道、丹生神社
5	願　成　寺　経　塚	海南市別所	○					願成寺
6	東　大　谷　経　塚	有田郡清水町東大谷	○				○	宝篋印塔基壇内
7	日　光　神　社　経　塚	〃　上湯川	○					日光神社
8	比井王子神社経塚	日高郡日高町比井	○		○	○	○	比井王子神社、保元三年(1158)
9	平　の　段　経　塚	〃　美山村初湯川		○				
10	寒　河　神　社　経　塚	〃　美山村寒川	○				○	寒河神社
11	丹　生　神　社　経　塚	〃　竜神村東		○				丹生神社
12	広　井　原　経　塚	〃　竜神村広井原		○				地蔵堂
13	岩　代　経　塚	〃　南部町西岩代		○			○	熊野街道、岩代王子
14	熊　岡　経　塚	〃　南部川村熊岡		○		●		熊野街道
15	高　尾　山　経　塚1号	田辺市上秋津・中畑	○			○	○	千光寺
	〃　2号	〃		○			○	
	〃　3号	〃		○		○	○	
16	仮　庵　山　経　塚1号	田辺市湊・神田		○				新熊野権現社
	〃　2号	〃	○			○	○	
	〃　3号	〃	○					
17	朝　来　経　塚	西牟婁郡上富田町朝来上ノ通り				○		玉泉廃寺
18	滝　尻　王　子　経　塚	〃　中辺路町滝尻	○			○	○	熊野街道、滝尻王子
19	飯　盛　山　経　塚	〃	○			○	○	〃
20	高　原　経　塚	〃　中辺路町高原				○	○	熊野街道
21	近露王子社経塚	〃　中辺路町近露				○	○	熊野街道、近露王子
22	本　宮　経　塚	東牟婁郡本宮町大黒島				○	○	熊野本宮関係、保安二年(1121)
23	如　法　堂　経　塚1号	新宮市相筋町下相筋	○				○	熊野速玉大社関係
	〃　2号	〃	○			○		〃
	〃　3号	〃	○			○		〃
	〃　4号	〃	○			○		〃
	〃　5号	〃	○				○	〃
	〃　6号	〃	○			○		〃
24	庵　主　池　経　塚1号	〃	○				○	熊野速玉大社関係
	〃　2号	〃	○			○	○	〃
	〃　3号	〃	○			○		〃
25	神　倉　山　経　塚1号	新宮市権現山		○		◐	○	神倉神社関係
	〃　2号	〃	○			◐	○	〃　、建治元年(1275)
	〃　3号	〃	○				○	〃
26	阿須賀神社経塚	新宮市阿須賀町	○			○	○	阿須賀神社関係
27	那　智　経　塚　群	東牟婁郡那智勝浦町那智山	○			○	○	那智飛滝神社関係、仁平三年(1153)

（●は瓦質土器）

なった。平安時代中期以降には神仏習合が行われ、各社の本地仏が阿弥陀如来、薬師如来、千手観音であると考えられるようになった。また当時は末法思想が流行し、弥勒菩薩が出世される56億7000万年後の世まで、経典を書写し埋めて保存しようとして経塚の造営が各地で開始されはじめた。その後このような目的の経塚が、やがて極楽往生・現世利益を祈願し、先祖の供養のために造られるように変化した。熊野地方では本宮経塚が保安２年（1121）に営まれたことが記年銘から知られ、現在知られている限りでは初出のものである。平安時代末から鎌倉時代にかけては熊野参詣の作善の一つとして三山の霊地に埋経することが定着し、新宮の権現山の峰々や那智飛瀧神社参詣道周辺に数多くの経塚が造営されている。和歌山県では経塚は高野山奥之院、粉河寺、熊野三山など早くから開かれた寺社を中心として分布しており、熊野三山への参詣道であった熊野街道沿いにも多数の経塚が造営されている。また、中央の山岳部でも寺社を中心として経塚が築かれており、護摩壇山や竜神の峰々が修験者の行場であり、熊野三山から吉野山、大峰山、高野山へも通じる修験道であったことから、その関連で理解されている。[註1]

（表１には確実な資料のあるもののみ掲載し、近世の礫石経々塚等は割愛した。）

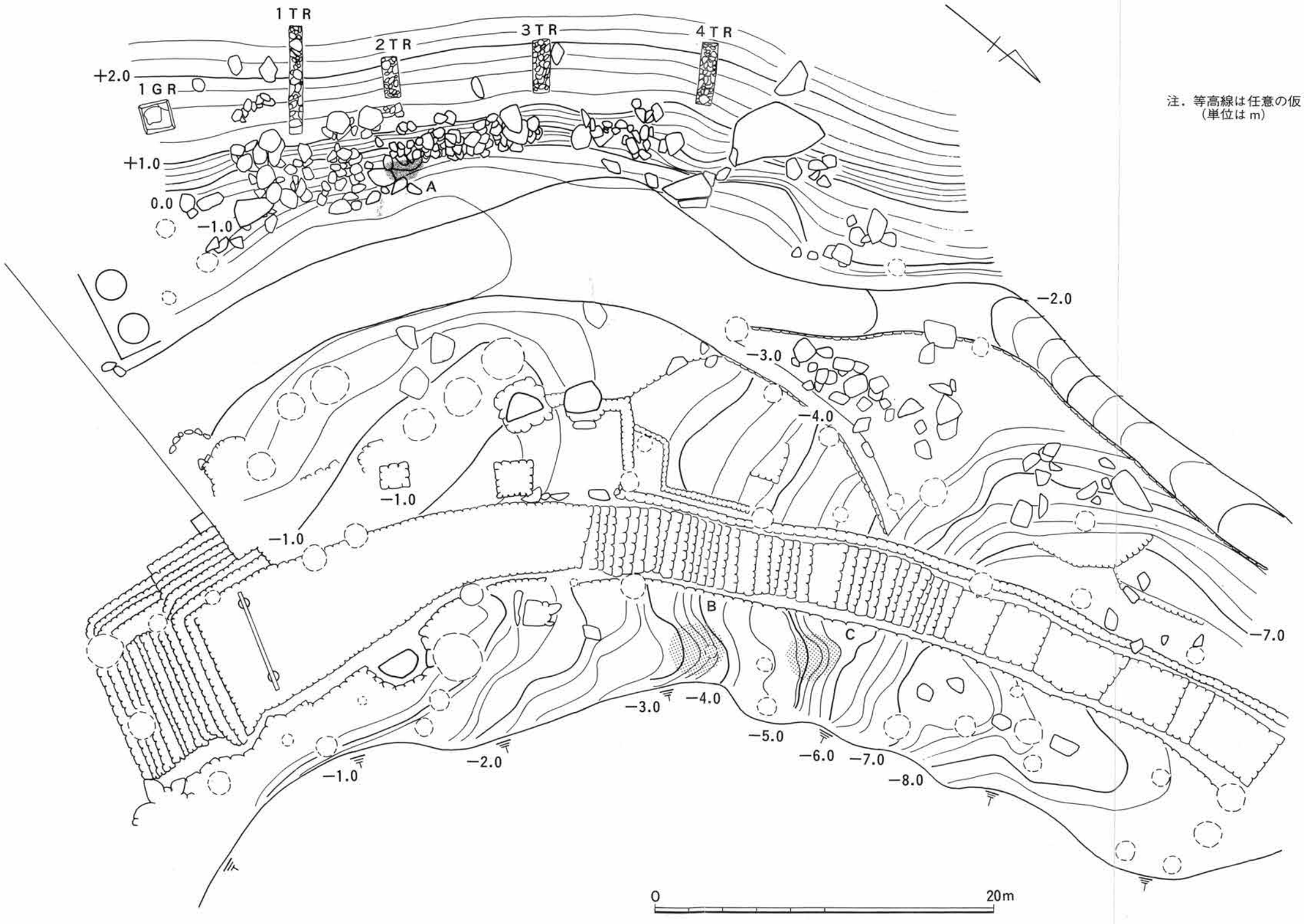
Ⅲ　調　　査

１　発掘調査　那智山経塚

那智山では第１調査地点と第２調査地点の２ケ所で発掘調査を行い、飛瀧神社の参道周辺を踏査して若干の遺物を表面採集した。

第１調査地点は那智山飛瀧神社参詣道入口の南西側斜面である。金経門石と呼ばれる巨石から駐車場まで約35ｍの長さにわたって、15ｍ程の幅で樹木を伐採し、腐蝕土の除去を行った。その結果、ほぼ全面が長さ２～３ｍの巨石から人頭大までの地元産の石英粗面安山岩で覆われていることを確認した。特に斜面裾部では巨石が積み重なって露出しており、巨石と巨石の間に広い空間が出来て経筒埋納には格好の地点が多数認められた。『那智山滝本金経門縁起』には、比叡山の僧であった沙門行誉が大治５年（1130）に三所権現御躰を本宝殿に安置し、800巻以上にのぼる写経を金剛界三十七尊養と八教養具を「相具」して、「巌崛」内に奉納した記録があるとされ、[註2]今回の調査でも「巌崛」状の地点を重点的に発掘した。しかし残念ながら、遺物がまとまって確認できたのは図２のＡ地点のみであった。Ａ地点では須恵質の甕、皿、東海系の壺等の破片が攪乱を受

写真１　飛瀧神社参道



注．等高線は任意の仮Ｂ．Ｍを0ｍとする。
（単位はｍ）

図２　那智飛瀧神社参道周辺図

けた状態で出土した。本来は経筒の外容器であったと思われる。次に調査区の南側から２×２ｍのグリッドを一ケ所、幅約１.５ｍ、長さ４～７ｍのトレンチを４ケ所設け、掘り下げた。第１グリッドでは偏平な巨石を２個確認したが遺物は皆無であった。砂質土が巨石の間に混じっていた。第１トレンチから第４トレンチまでは表面はあたかも古墳の葺石のごとく20～30cm程の小さな石で覆われていたが、掘り下げると巨石が露頭し、さらに奥には50cmから２ｍ程の巨石が組み合わさっていた。腐蝕土以外に土砂は無く、まさしく涸れた沢のようであった。このあたりは明治時代から昭和初期にかけて木馬道で材木の運搬路として利用されていたとのことで、第３トレンチや第４トレンチで釘や鎹、ボルトなどが出土した。それ以外に遺物は発見できなかった。

飛瀧神社参詣道周辺では、図２のＢ・Ｃ地点で人頭大の石を積み上げた径３ｍ程の高まりが認められ、Ｂ地点では東海系の壺の底部を採取した。経塚の可能性があり、未調査の地点である。

第２調査地点は、第１調査地点の西側斜面を約 100ｍ登った場所に位置する。周辺は背後と前面を急斜面で隔てられた平坦地で、表面は人頭大の石で覆われ、所々に巨石が散在していた。この部分に２本のトレンチを設け発掘したが、近世の陶器の破片が数点出土したのみで、経塚やそれに関連する遺物は皆無であった。なお、巨石の周囲を重点的に踏査したが経塚に関連した遺構は確認できなかった。

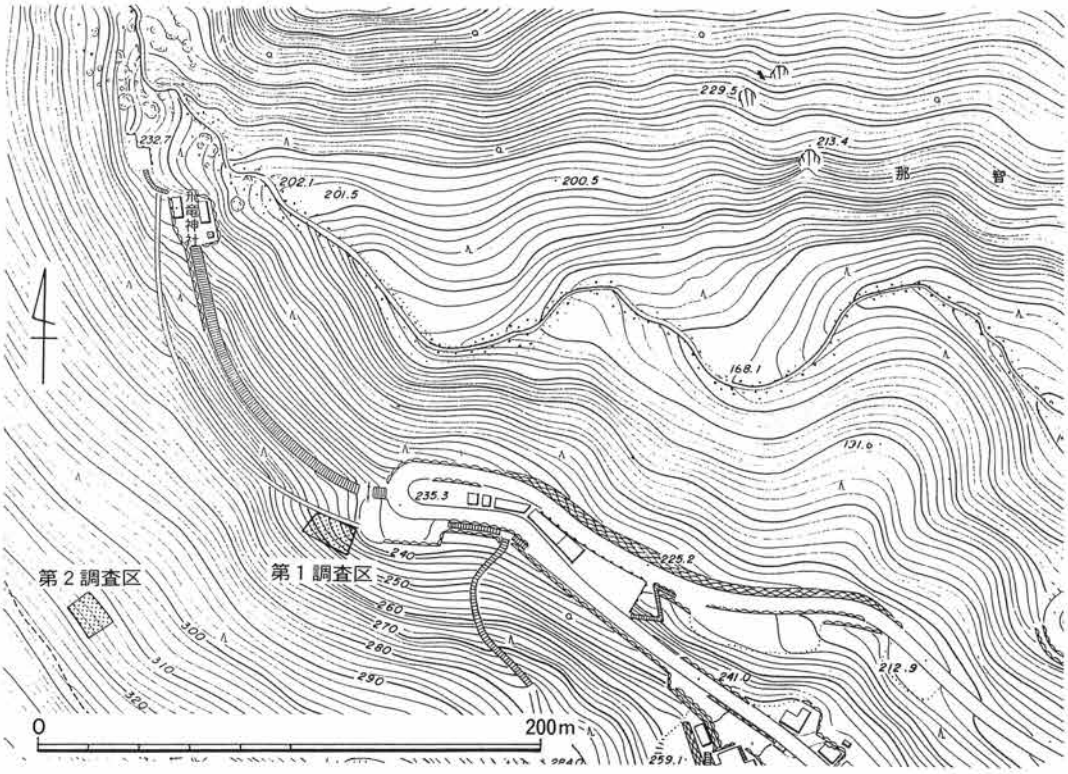


図３　那智山調査区位置図

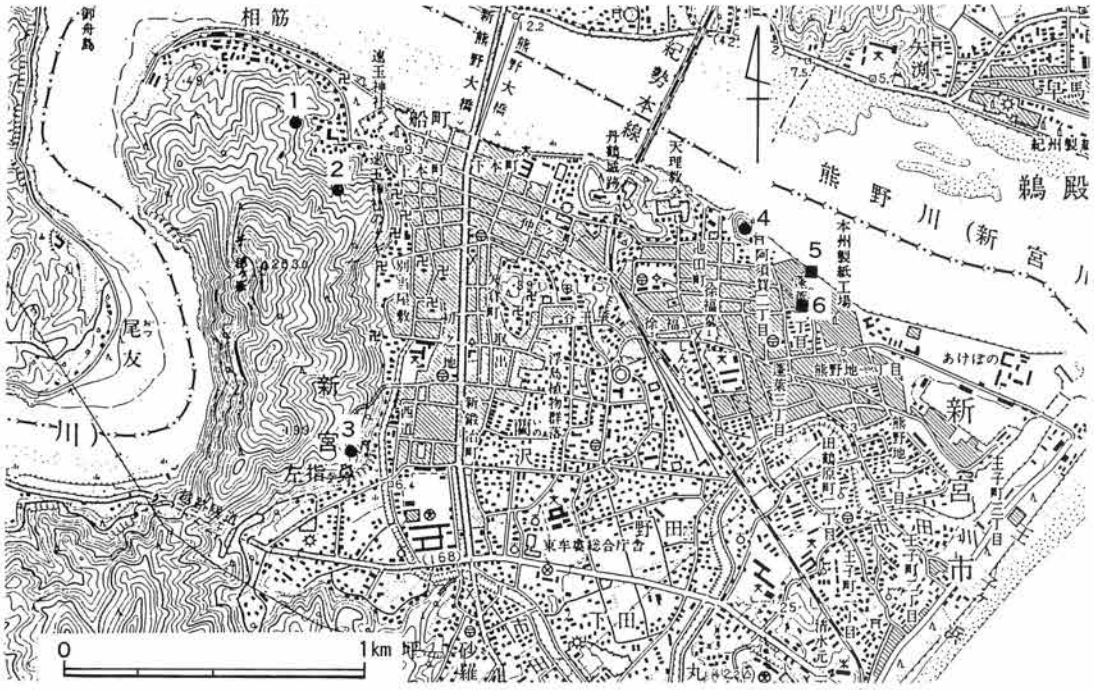
2　分布調査

新宮市

新宮市では踏査による分布調査を行った。踏査は標高 253ｍの千穂ケ峰を主峰とする権現山、明神山、丹鶴城、ぽっつり山、蓬莱山、宮井戸遺跡、白玉稲荷神社周辺で実施した。また従来から知られている如法堂経塚群、庵主池経塚群、神倉山中ノ地蔵経塚群[註3]、阿須賀神社経塚を現地で確認し、地図上に記録した。今回の調査は踏査による表面観察のみであったので表面採取した以外の遺物の有無や埋没している遺構については確認することが出来ず、また経塚であろうと推定した地点も、あくまでも推定の域を出ないことをお断りしておきたい。

写真２　ごとびき岩

権現山では庵主池経塚群北約30ｍ下方の標高約60ｍの尾根筋上に山側斜面を切り崩した小さな平坦地があり、そこには人頭大から数十cm大の川原石が多数積まれており、経塚の可能性がある。庵



1　如法堂経塚群　　4　阿須賀神社経塚
2　庵主池経塚群　　5　宮井戸遺跡
3　神倉山経塚群　　6　白玉稲荷神社

図４　新宮周辺図

主池の東側から北東と東に延びる２つの尾根筋上にも巨石が露呈して巌窟状に組み合わさった地点があり眼下には速玉大社と熊野川が広がり、納経には格好の場所である。如法堂経塚群の所在する尾根筋上でも標高約50～70ｍの緩斜面上に巌窟状に巨石が重なり合った地点を３ケ所確認した。如法堂経塚群のように巨石の岩陰を利用して、これらの地点に経塚が営まれている可能性がある。

明神山では、北西部の平坦地で人頭大の河原石を一辺２ｍにコの字状に埋設した基壇状の遺構を確認したのみにとどまった。小さな祠跡ではないかと思われる。丹鶴城周辺では城の造成によって広範囲に削平されていて経塚らしき遺構は確認できなかった。丹鶴城の南向いに立地する通称ぼっつり山では、山頂部から数ｍ下った南東の緩斜面に10cm程の偏平な河原石が数個まとまって露呈しており、腐蝕土の下にはさらに多くの河原石が存在しているようであった。遺物等は無く実態は不明である。蓬莱山では、南西斜面に巨岩が積み重なって露呈しており、その間には室状の広い空間が出来ている。南東の山裾部では挙大の河原石の集石地点を１ケ所確認した。宮井戸遺跡は、熊野川に面して数ｍの巨岩が多数積み重なり、あたかも古墳の横穴式石室のようで、中からは近世の経石が出土したと言われている。白玉稲荷神社の裏側にも数ｍの巨岩が地上に露出しており、石の裂け目や周辺で弥生土器や須恵器、山茶碗、石斧や砥石等を表面採取した。

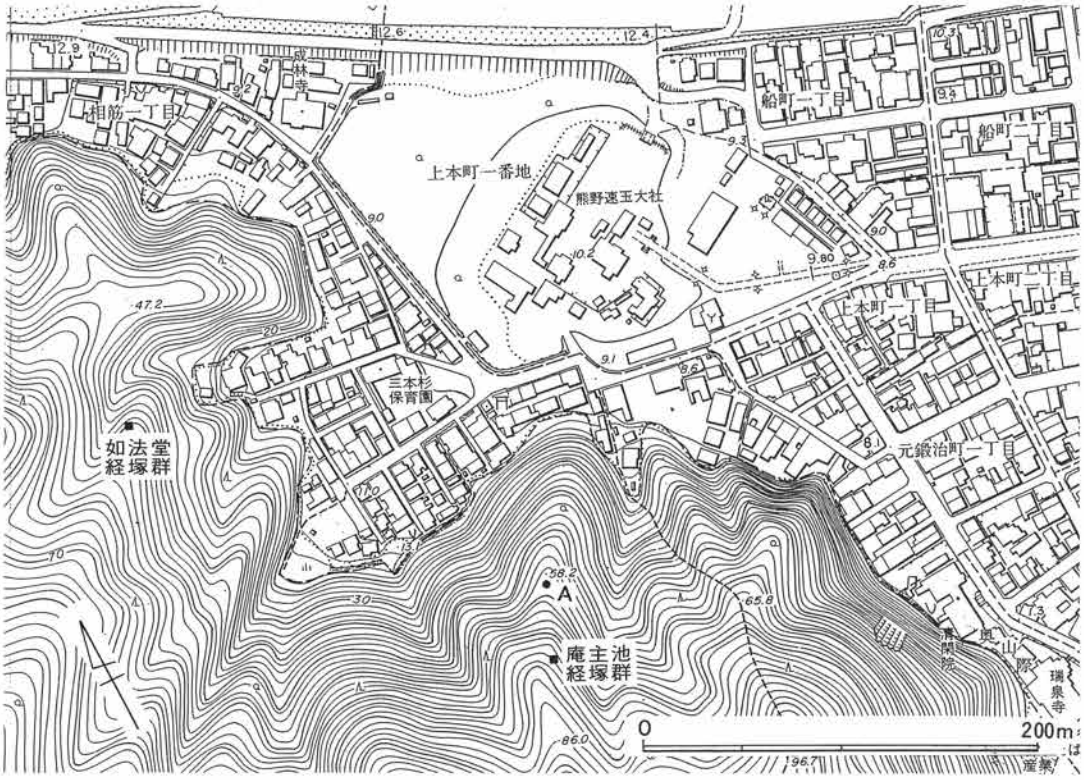


図５　速玉大社周辺図

本宮町

本宮町では山在峠から吹越峠、七越山を経て本宮大社旧社地対岸の備崎に至る尾根筋と、備崎から大黒島周辺、旧社地周辺、大日山の熊野古道周辺を踏査した。その結果、備崎周辺で経塚に関連すると思われる遺構および遺物を確認した。

本宮大社は本来は中世の絵巻物に描かれているように[註4]、江戸時代まで熊野川と音無川との合流地点の中洲に立地していたが、明治22年に大水害で壊滅的な破壊を受け、その後は北方の丘陵上に移り現在に至っている。旧社地周辺では砂泥が堆積しており、経塚の痕跡を見つけることは困難であった。このような事情から本宮周辺で経塚に関連した遺物は、備崎で文政８年（1825）に社地の石垣を修復するために石材を採取したときに崩壊した砂礫の中から出土したとされる経筒が唯一の例である。現在、東京国立博物館で保管されている銅製経筒と陶製外容器がこれにあたると考えられており、外容器には「熊野山如法経銘文大般若一部六百巻白瓷箱十二合箱別五十巻保安二年

写真３　熊野本宮大社

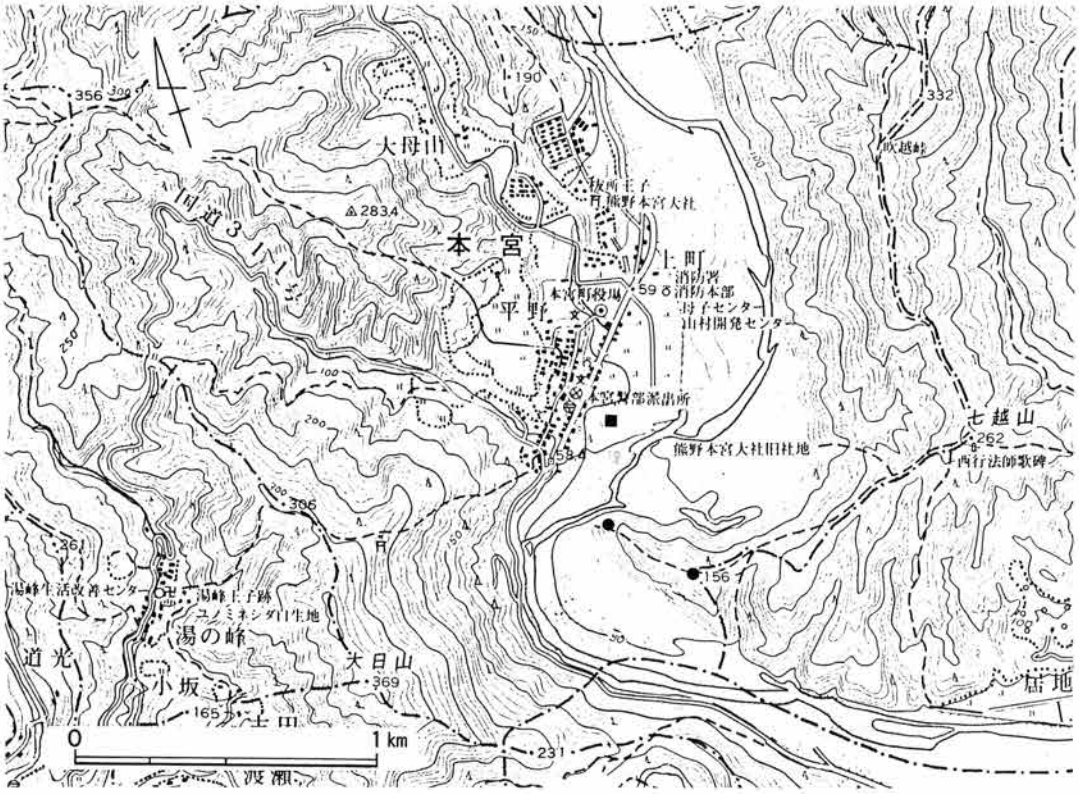


図６　本宮周辺図

歳次辛丑十月日願主沙門良勝檀越散位泰親任」の７行51文字が外側に鏤刻されており、製作年代と願主が明記された貴重な資料である。

備崎を踏査した結果、図７のＡ・Ｂ両地点で経塚の可能性がある遺構を確認した。Ｃ地点では瓦質の経筒か外容器と考えられる土器の底部を採取した。Ｄ地点は海神社跡で土師器の皿や山茶碗の破片を採取したが、経塚に関連した遺構および遺物は確認できなかった。

Ａ地点は標高 159ｍの山頂に位置し、直径10ｍ程度の平坦地である。周辺には20～30㎝の河原石が散乱し、須恵質の甕の破片を約10片を表採した。西側には長さ１ｍ、幅 0.5ｍ程の穴が掘られており、かなり攪乱されているようである。Ｂ地点は尾根筋から北に延びる比較的緩やかな斜面で旧社地と熊野川を挟んで対面する絶好の場所に位置し、ここで人頭大の河原石を積んだ遺構を４ケ所で確認した。積石は円形もしくは楕円形状で、規模は小さなもので径約 0.8ｍ、最大のものは南北約 3.0ｍ、東西約 3.5ｍである。下部構造は全く不明であるが、石積みの間から東海系の壺の底部が出ており平安時代末から鎌倉時代頃の遺構ではないかと推測される。Ｃ地点は大黒島と呼ばれている十数ｍの巨岩が切り立った場所で、修験道の道場とされてきた巨大な巌窟の側の岩の裂け目から前述した直径約15㎝で瓦質の土器の底部を採集した。近くに営まれた経塚から運ばれてきた可能性がある。

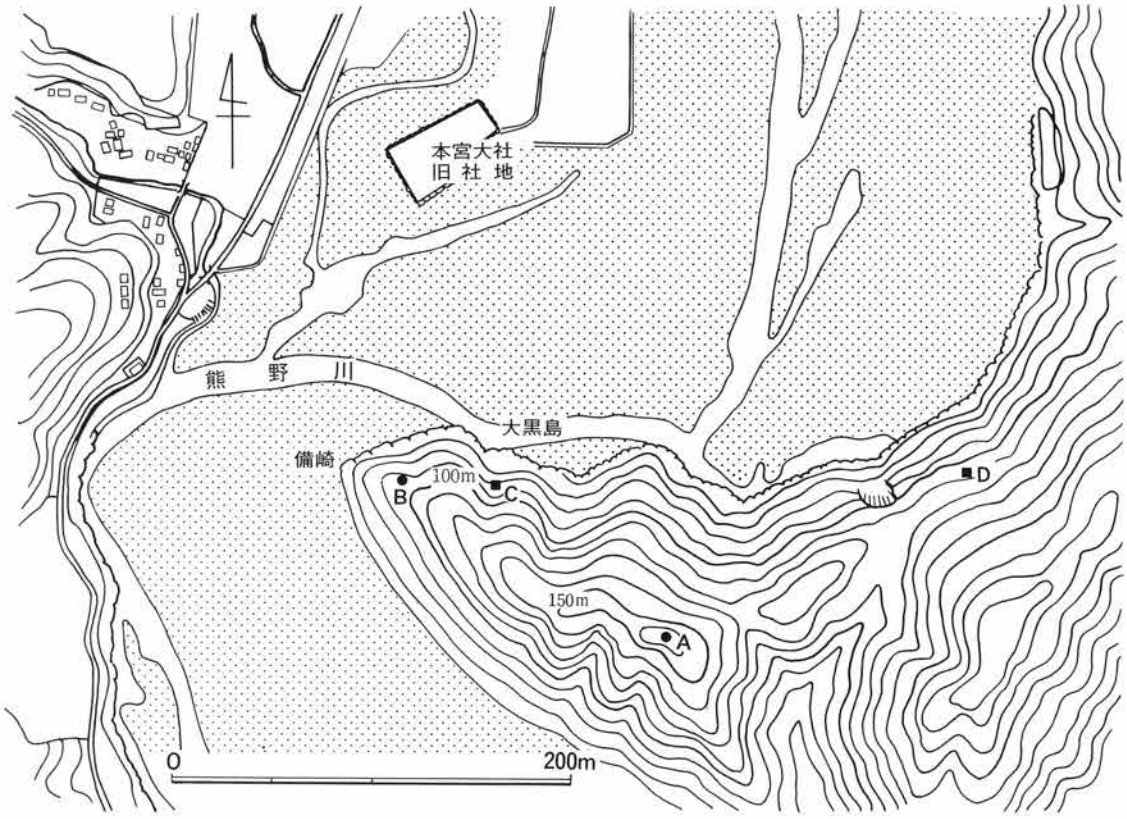


図７　本宮大社旧社地および備崎周辺図

3 遺　物

1は那智山飛瀧神社参道東側のB地点で表採した東海系の壺の底部である。淡灰褐色で胎土は砂粒が多くやや粗い。2は本宮町備崎B地点で表採した東海系の壺の底部である。3は本宮町備崎の大黒島の巌窟から採取した瓦質の経筒あるいは経筒の外容器と考えられる土器であり、直径約15cmの粘土円筒の底部に粘土円板を挿入して接合している。円筒の内外面には縦方向の磨きがみられ、円板の内側には指頭圧痕が認められる。4・5・6は那智山第1調査区A地点から出土した。4は須恵質の大皿で外容器の蓋でないかと思われる。5は産地を特定できないが、東海系の壺で、内外面には淡灰緑色の釉がかかる。経筒の外容器と思われる。6～9は山茶碗の底部である。7～13は新宮市の白玉稲荷神社裏にある巨石の周囲で表面採取した遺物である。10は砂岩製の砥石で片面に磨耗痕がみられる。11も砂岩製の砥石で中央には石英質の筋が通り、両面とも磨耗しており一部に細かい擦痕がみられる。12は扁平片刃石斧からの再加工品と思われる石器で両面に刃面をもち側面や基端部も磨かれている。石材は断定できないが、淡青灰色の粘板岩系統のものである。13は砂岩製の叩石と思われ、先端部は激しい打撃をうけて欠けている。14・15は那智山第1調査区A地点から出土した。14は東海系の三筋壺である。淡明褐色の胎土に黄緑色の釉がかかっている。15は須恵質の大甕で、外面には格子叩きが施されており淡灰色で焼成堅緻である。16～19は新宮市の白玉稲荷神社裏の巨石の周囲で採取した。16は弥生土器の把手の一部である。直径2㎜程の刺突文が2列施されている。17～19は弥生土器の甕の底部である。20は備崎のA地点で表採した須恵質の甕で、体部外面にはシャープな平行叩きが施されている。

Ⅳ　ま　と　め

今回の調査の結果、那智山では第1調査区で経塚に関連すると思われる遺構および遺物を確認したが、攪乱が著しく造営当時の様相を知ることは不可能であった。飛瀧神社参道の東側には、2ケ所に人頭大の石を積み上げた径3m程の高まりがあり、未調査の経塚の可能性がある。新宮市では権現山の庵主池経塚群の北約30m下方の尾根上に山側斜面を切り崩した小さな平坦地があり、そこには人頭大から60cm程の河原石が多数積まれており、経塚ではないかと思われる。同じく権現山の如法堂経塚群上方の尾根筋上に数ケ所で巨岩が組み合わさって露出しており、周辺に経塚が築かれている可能性がある。白玉稲荷神社裏の巨石の周囲には弥生時代中期末の弥生土器や石器、須恵器、山茶碗の破片が散布しており、周辺に弥生時代から中世に至る遺跡が営まれていたようである。本宮町では本宮大社旧社地対岸に半島状に突き出た備崎の先端部分の北側斜面と、標高159mの山頂部の2ケ所で経塚でないかと考えられる遺構を確認し若干の遺物も採取した。山頂部のものは、かなり攪乱を受けて破壊されているが、北側斜面部の方は少なくとも4ケ所以上で河原石が積まれており、遺存状況は比較的良好である。また、大黒島と呼ばれている巨

大な岩窟の岩の裂け目からは瓦質の経筒あるいは外容器と考えられる土器を採取した。こうしたことから、備崎周辺には今まで知られていなかった多数の経塚が営まれている可能性が高く、さらに精細な踏査を重ねればその数は増加するものと思われる。

熊野三山の経塚の造営方法は大別すると、自然の巨岩を利用して周囲の岩陰に経筒や経筒を納めた外容器を鏡や刀子などと供に埋納する方法と、山頂や緩斜面の平坦地に穴を掘り込みその中に石で石槨を築いて外容器を納める方法に大別でき、前者には那智経塚群や神倉山経塚群が属し、後者には庵主池経塚群が属する。また、小数であるが方形基壇状に石組みをしたものが那智経塚群にみられる。

参 考 文 献

1　羯磨正信・伊勢田進　「和歌山の経塚」　『和歌山の研究』　1地質・考古篇　昭和54年

2　奈良国立博物館編　『経塚遺宝』　昭和52年

3　篠原四郎　「那智経塚」　『那智叢書』　第五巻　昭和39年

4　『和歌山県史』　考古資料編　昭和58年

5　安藤精一編　『図説　和歌山県の歴史』　昭和63年

6　地方史研究所編　『熊野』　昭和32年

7　望月薫弘・中野宥　『紀伊阿須賀遺跡第2次発掘調査』　阿須賀神社文化財保存会　昭和54年

註

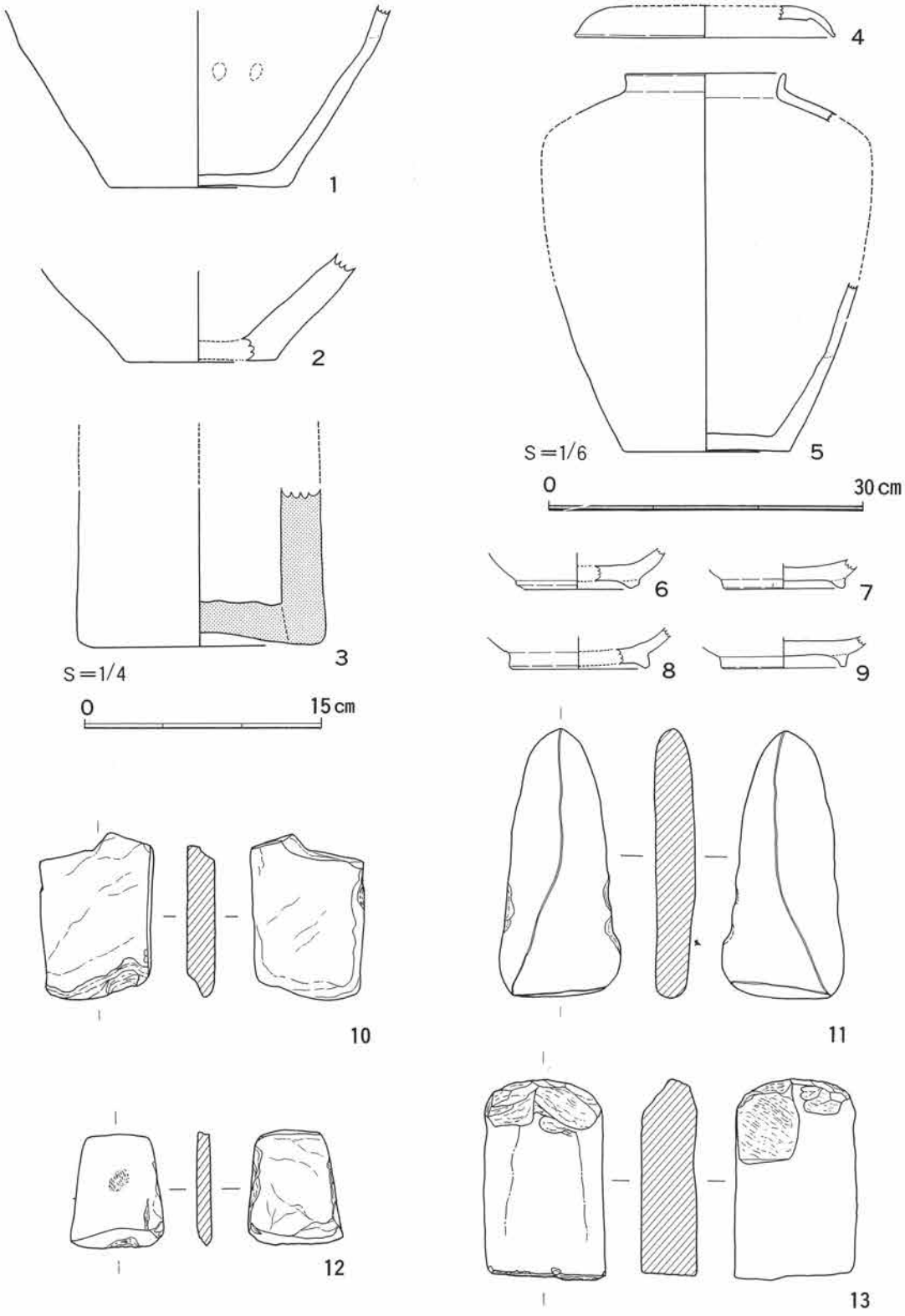
1　羯磨正信・伊勢田進　「和歌山の経塚」　『和歌山の研究』　1地質・考古篇　昭和54年

2　杉山洋　「熊野三山の経塚」　『文化財論叢』　昭和58年

3　上野元・巽三郎　『熊野新宮経塚の研究』　昭和38年

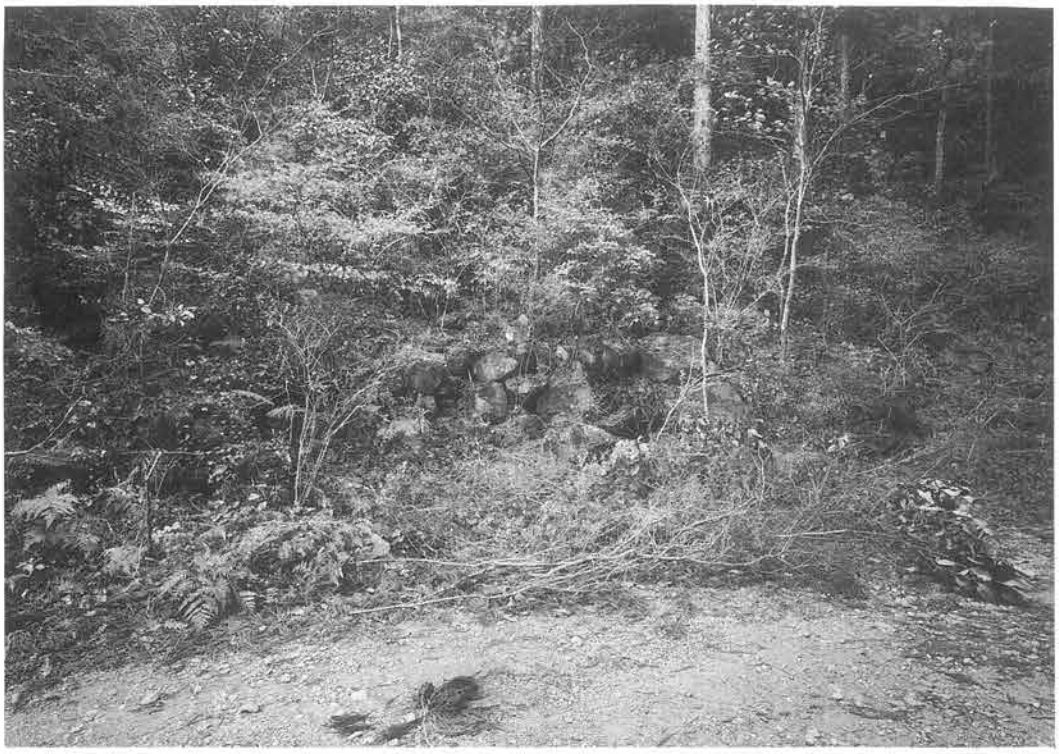
4　小松茂美編　『一遍上人絵伝』　（『日本絵巻大成別巻』）　昭和53年

図8 遺物実測図



図版1

1　那智の滝遠景



2　那智山第1調査区調査前景

図版2

1　那智山第１調査区全景（南東から）

2　那智山第１調査区北半部（東から）

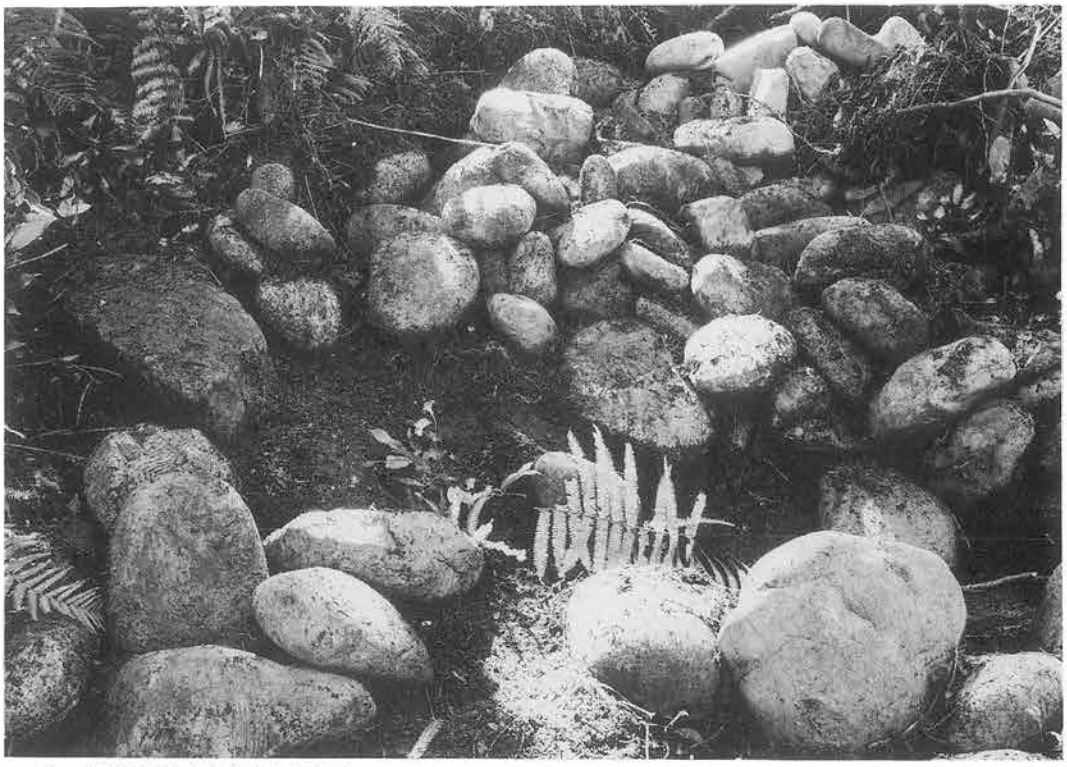
1　那智山第１調査区第１トレンチ

2　那智山第１調査区石組み状況

1　権現山Ａ地点河原石集積状況

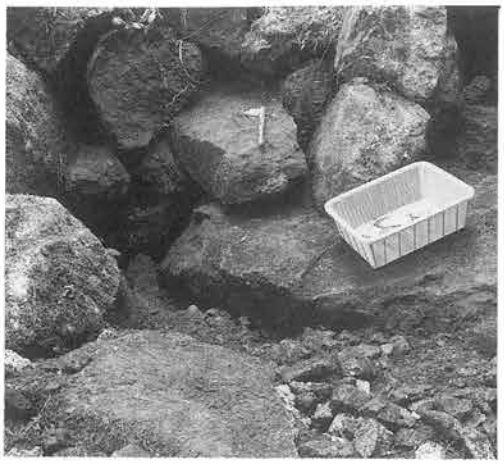
2　蓬莱山南西部巨石群

1　備崎遠景（本宮大社旧社地から）

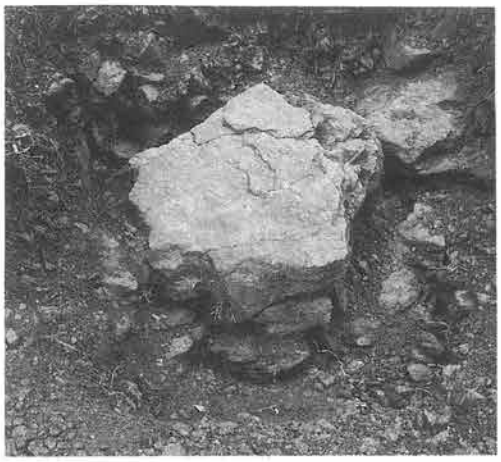


2　備崎Ｂ地点河原石集積状況

1　那智山第１調査区南半部（東から）



2　那智山第１調査区発掘状況



3　那智山第１調査区第１グリッド

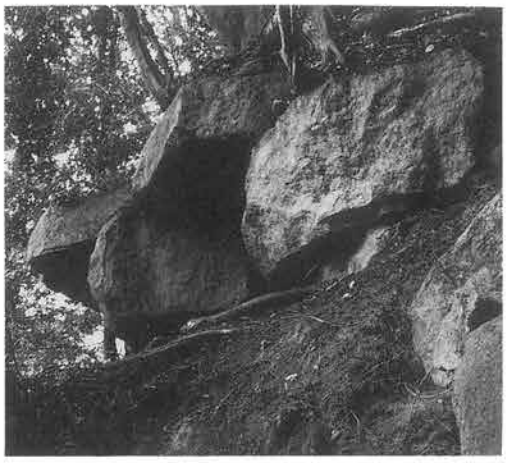
4　飛瀧神社参道横Ｂ地点

5　Ｂ地点遺物出土状況

6　那智山第２調査区（北から）

1　新宮市遠景（神倉山から）

2　明神山北尾根部の石組み



3　蓬莱山南西部巨石群

4　蓬莱山南西部巨石群

5　蓬莱山南東部河原石集積状況

6　白玉稲荷神社裏の巨石

1　本宮大社旧社地と備崎（北から）

2　備崎と本宮大社旧社地（南から）

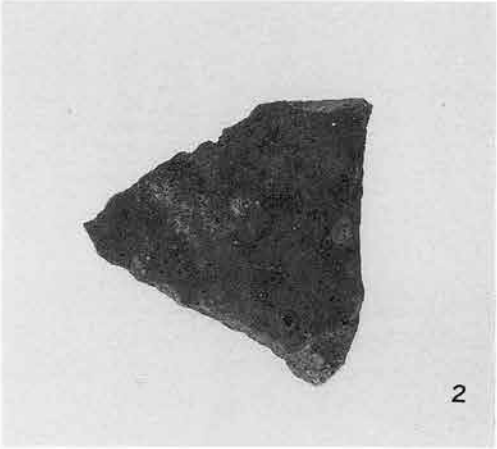
3　備崎（正面対岸から）

4　備崎Ｂ地点河原石集積状況（下から）

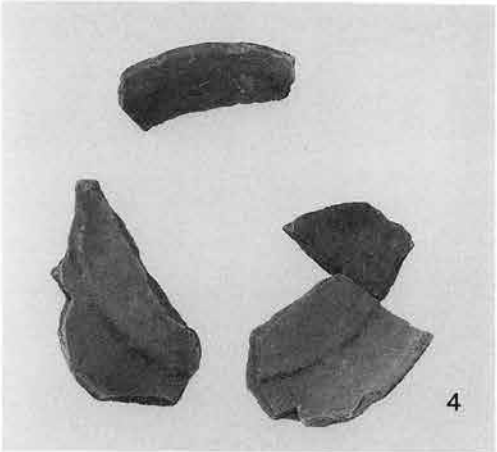
5　備崎Ｂ地点河原石集積状況（上から）

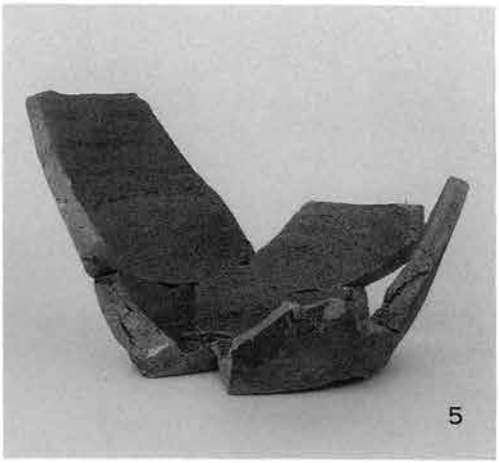
6　備崎山頂部Ａ地点

1

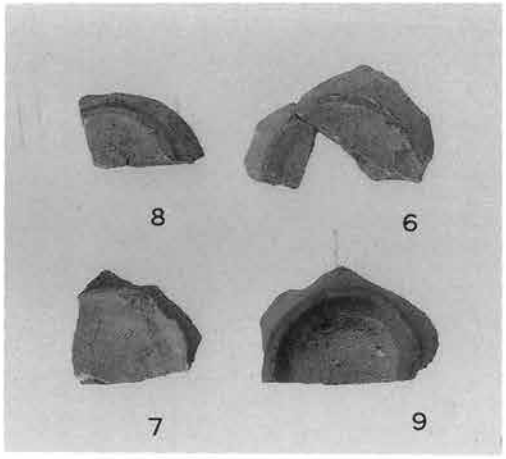

2

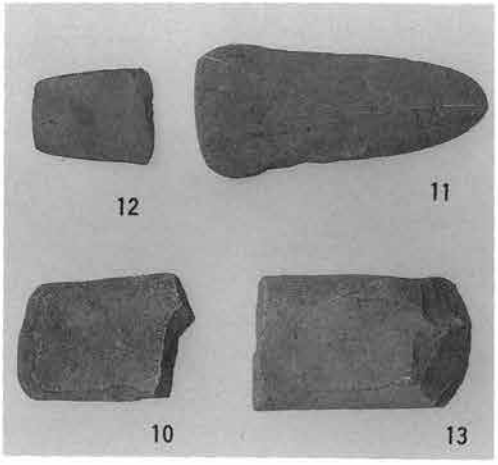
3

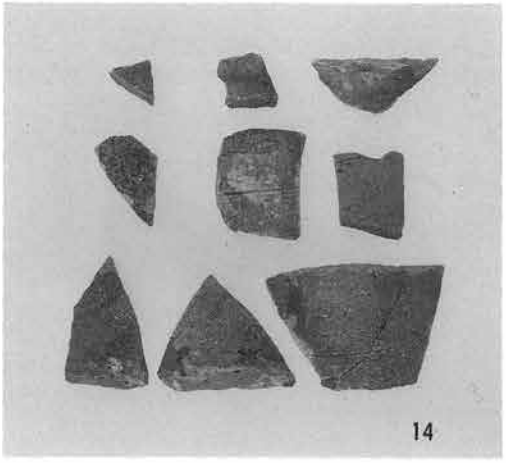

4

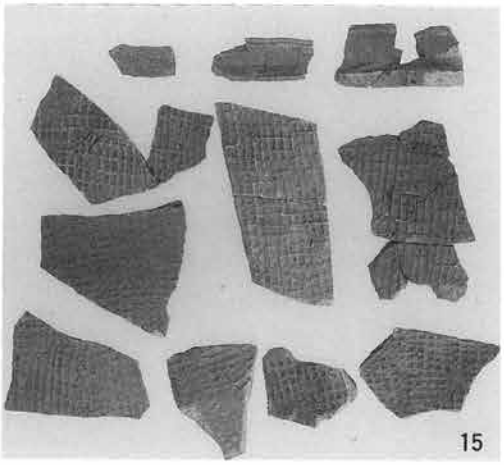

5

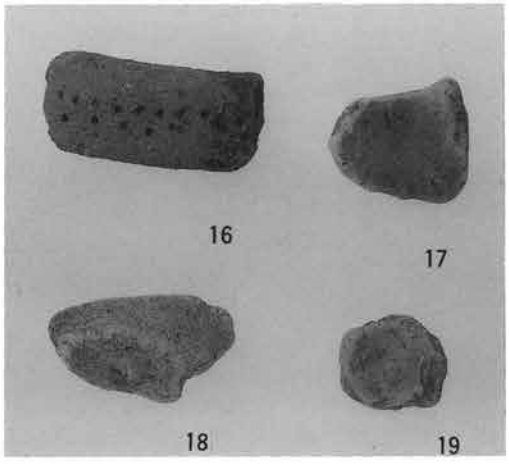
図版10

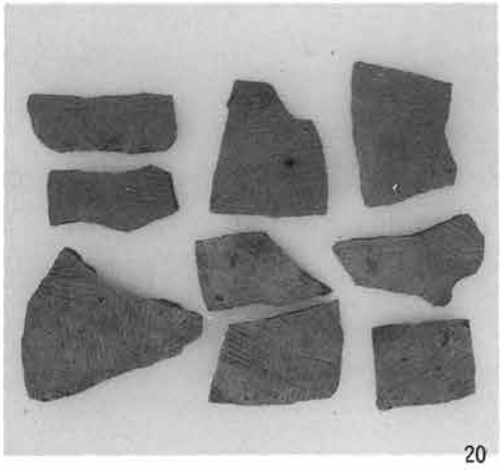












平成２年３月31日　印刷
平成２年３月31日　発行

平成元年度

東牟婁地方
広域遺跡群詳細分布調査概報

編集
発行　和歌山県教育委員会

印刷　邦上印刷